

Sophia-R

Sophia University Repository for Academic Resources

Title	「あわいの世界」を生きる
Author(s)	榎本, 香織
Journal	グリーンケア
Issue Date	2021-03-31
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	Publisher
URL	https://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/20210308013
Rights	



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

「あわいの世界」を生きる

Living in an “In-Between World”

金菱清『震災メメントモリ 第二の震災に抗して』新曜社、2014年

金菱清（ゼミナール）編『呼び覚まされる霊性の震災学 3.11 生と死のはざままで』
新曜社、2016年

同上『3.11 霊性に抱かれて 魂といのちの生かされ方』新曜社、2018年

同上『震災と行方不明 曖昧な喪失と受容の物語』新曜社、2020年

葵会柏看護専門学校非常勤講師

榎本 香織

Kaoru ENOMOTO

要旨：本稿は、金菱清とゼミ生による震災をめぐる著書四冊（『震災メメントモリ（2014）』『呼び覚まされる霊性の震災学（2016）』『3.11 霊性に抱かれて（2018）』『震災と行方不明（2020）』の書評論文である。金菱は震災直後の津波による直接被害を「第一の津波」、その後やってくる生活全般の過酷な再編と心身の苦痛の経験を「第二の津波」と名付け、後者に注目する。被災者達はコミュニティの力に助けられながら、また、自らの生き方や価値観に合わせた形で死者や行方不明者たちと向き合い、その関係性を再構築しながら生きている。その一つ一つの生き方に着目し、細かに描写することで、死の向き合い方や悲嘆の中での生きなおしについての手がかりを模索する。その際に重要な要素の一つとして「曖昧な領域のものを曖昧なままにしておくこと」が挙げられ、その中で人々のレジリエンスが時間をかけて醸成されていく。

キーワード：東日本大震災、曖昧な喪失、公認されない悲嘆、レジリエンス

1. はじめに

2020年9月30日、東京電力福島第一原発事故の被災者約3,864¹⁾名が、国と東京電力を相手に起こした「生業（なりわい）訴訟」の控訴審判決が言い渡された。判決は一審に続き国と東電の責任を認めるもので、一審では国の責任が東電の半分とされていたが、今回は東電と同等の責任があると認めた点、そして賠償の対象地域の拡大や賠償水準の上積みをも認めた点が画期的といえる。損害賠償も倍額となり、広く被害者救済をはかるという意味においても前進した判決と評価された。

原告の一人は「お金の問題ではない部分ではありますが、とりあえず賠償という形で心へのけじめをつけることはやむをえないと思いますので、原告1人1人に寄り添った判決に

なつたと思います」とコメントしている²⁾。原発を巡る集団訴訟は2020年10月現在で約30、更には個人訴訟もあるが、今も戦い続ける被災した人びとの姿がここにある。

この訴訟の「生業を返せ、地域を返せ！」のスローガンが示すとおり、自身の「生」の一部を強制的に剥奪された被災者達に起きたできごとは、いわば現代日本版ディアスポラと言える。実際に故郷からの離散を余儀なくされた場合もあれば、地域に留まりながらも大切なものを喪ったという意味での「かつての日常に戻れない=故郷喪失」という形もある。様々な喪失が、被災した人びとの数だけ存在する。

東日本大震災から10年が経つ。今もそれぞれの形で、震災が起こらなければ過ごす筈であった日常と、その世界線とは異なる現在の日常の狭間を生活している人びとがいる。本稿で取り上げるのは、様々な二つの異なる領域の間にある世界=「あわいの世界」を生きる被災者たちの眼差しや生き方、そこから生まれたものに着眼した金菱清（かねびし・きよし）氏とそのゼミ生による論考である。

2. 著書と本稿の構成について

本稿では、以下の4冊を取り上げる。

- A『震災メメントモリ 第二の震災に抗して』新曜社、2014年
- B『呼び覚まされる霊性の震災学 3.11生と死のはざままで』新曜社、2016年
- C『3.11 霊性に抱かれて 魂といのちの生かされ方』新曜社、2018年
- D『震災と行方不明 曖昧な喪失と受容の物語』新曜社、2020年

Aは金菱氏の単著、B～Dは氏が当時所属していた東北学院大学³⁾で立ち上げた「震災の記録プロジェクト」ゼミ生による論考を主とした編著である（B,Cは金菱、Dは他研究者2名の寄稿あり）。金菱氏自身の専攻は環境社会学・災害社会学で、2012年に71名の被災者の体験を記録した『3.11 慟哭の記録 71人が体感した大津波・原発・巨大地震』（新曜社）を筆頭に、震災や被災者の生き方や死者をめぐる多数の論考を精力的に発表されている。「復興」の名のもとに置き去りにされた被災者一人ひとりの生き方を拾い上げることで、これまで日本社会が蓋をしてきた「死」の問題とどのように向き合い、生へと繋げるかの問題提起をする。

グリーンケア（もしくはスピリチュアルケア）の研究は、人間そのものが対象となる以上、医学や心理学、あるいは宗教学などからのアプローチが多い傾向にあり、社会学的見地からの論考はまだ十分とは言えない。金菱氏自身はこれらの著書をグリーンケアと直接的に位置づけている訳ではないが、内容は十分にそう読み進められるものである。今後のグリーンケアの学術的発展の見地から鑑みるに、学際的な領域からの研究の蓄積を経ることで、より厚みと深みを増すことが期待されることから、金菱氏の業績はそれだけで大きな意義をもたらすと言える。

本稿では、まず各著書/編著の内容紹介をするが、B, C, Dについては内容の構成と紙面の都合上、纏めて紹介したい。その後にコメント及び今後の課題を提示したいと思う。

3. 『震災メモトモリ 第二の津波に抗して』

本書の目次は、以下の通りである。

写真集 3.11以降を生きる震災誌

はじめに

第1章 彷徨える魂のゆくえをめぐる——災害死を再定位する“過剰な”コミュニティ

第2章 「生きなおす」ための祭礼——拠って立つ居場所を具現化する祭礼の意義

第3章 内なるショック・ドクトリン——第二の津波に抗する生活戦略

第4章 千年災禍のコントロール——原発と津波をめぐる漁山村の論理

第5章 「海との交渉権」を断ち切る防潮堤——千年災禍と日常を両属させるウミの思想

第6章 震災メモトモリ——痛みを温存する「記録筆記法」と死者をむすぶ回路

震災覚え書き——ねじれていった心（赤井志帆）

おわりに

第1章は、津波が起こした非日常（家族の搜索・遺体との対面・埋葬・処理）へと強制的に投げ込まれたある女性の数日間の描写から始まる。

災害死の遺体は、損傷が激しい場合、一部しか戻らなかった場合、遺体さえ見つからず行方不明の場合など、一様ではない。にもかかわらず、大規模災害における行政の死者への対応が“禁断”の領域となっていた現状があり、まさにこの災害死の領域が宙吊り状態であったことを金菱は指摘する。金菱は、この死の宙吊り状態を内田樹の「中間項」の概念を援用して説明し、生者は彷徨える魂に此岸から彼岸へ導かれることで、自殺やアルコール依存症などを生む危険性が高まり、死者もまた浮かばれないという状況を生み出すとする（金菱2014：25頁）。

この「生者が彼岸に吸い寄せられやすい状態」に対処する処方箋として、他者に過剰に干渉するコミュニティの機能（“過剰な”コミュニティ）に着目し、その例として関東地区の自治会を取り上げる。被災地ツアーや慰霊祭、居酒屋等の行事を通じ、自治会が個人で背負うには重すぎる責任を引き受けることで、個人および家族は孤獨な消耗戦の負担を軽減させ、積極的に生き続ける主体として再定位されるとする。

第2章は、震災復興としての祭礼や民俗芸能の実施が果たして本当に有効かについて、宮城県石巻市旧北上町の釣石神社、同県女川町竹浦の「獅子振り」、岩手県宮古市浄土ヶ浜の「鎮魂の祈り」プロジェクトの3つの事例を元に検証している。結論から述べると、

震災復興に祭礼や民俗芸能が有効な場合には、シンボルの存在のみならず、それを支える強固な〈ワレワレ意識のネットワーク〉が基盤として存在することが前提であるという。そしてこの〈ワレワレ意識〉は、必ずしも参加者の地域属性に限定されるものではなく（「鎮魂の祈り」プロジェクト）、逆に同じ地域同士であっても意識に温度差が生じれば（釣石神社）、機能不全に陥るとも分析している。

第3章は、カナダのジャーナリスト、ナオミ・クラインの「ショック・ドクトリン」の理論が、被災した漁民自らの手によるコミュニティの内部改革において実現されることで、行政による画一・強制的な構造改革の手を封じ、自らの共同体をよりふさわしい形で再生した4地域の事例を挙げる。

「ショック・ドクトリン」とは、災害処理を市場チャンスとして捉えて公共領域に正当性をもって参入する「惨事便乗型資本主義」において、自由市場主義の徹底化を一気呵成に推し進める荒療治のことを指す。行政の目指した「水産業復興特区」は、新規に外部企業を参入させることで産業を活性化させるという風に一見聞こえはいい。しかし昔から漁業を生業としてきた現地の人びとにとっては、長年の知恵と経験で築き上げた、いわば社会的ビオトープ破壊以外の何者でもない。漁民内部による改革を金菱は「創造的破壊」「内なるショック・ドクトリン」と呼称するが、それは既に内在化されていた共同体の諸問題をこの機に噴出させて同時に対応するというところに、外部による一方的なショック・ドクトリンとは異なる、自己修復性・自己完結性をも含むことを指摘する。

第4章は、リスクの高い非居住区域に敢えて住み続ける人びとの行動原理を検討することで、災害リスクや居住の権利剥奪に対処するコミュニティの潜在力について言及する。

福島県飯館村で農家を営むある一人の女性にとって、村での牛やトルコキキョウの生産を通じた生き方は、産業以上の意味合いを持つという。言うなれば彼女にとって飯館村という地は「土地-牛・キキョウ-人間」が包摂された「いのち」そのものであり、そこに降りかかった原発事故も、「リスク」という意味においては、冷害などの自然災害と線引きを行っていないという。原発事故さえもライフサイクルの一部として組み込まれている女性の、壮大ないのちのダイナミズムがここに立ち現われる。

また、宮城県石巻市十三浜では、名産品のワカメ漁場が壊滅状態に陥り、県より「水産業復興特区」の案が持ち出されたものの漁協は反対、一丸となり対策を行った。それは、被災した全ての組合員が最低限の生活を保証できるよう、被害の多寡にかかわらず船と収益を均等に分配するという共助のシステムづくりであった。

両事例を通じ、金菱は高リスクの土地に敢えて残る人びとによって形成される地域コミュニティは「災禍を吸収する弾力的なダイナミズム」を潜在的に保持していると結論づける。津波や原発も彼らにとっては内部条件のリスクに過ぎず、リスクだけを取り上げて安心や安全を叫ぶ復興計画に警鐘を鳴らす。

第5章は、巨大防潮堤建設計画に反対する漁民たちの、理屈を超えた海と不可分の「生」

の在り方について、気仙沼・内湾の漁港の事例を元に触れる。住民の生命や財産の安全のためとして、行政は防潮堤をはじめとする土地計画を立案するが、住民との合意形成が行われないまま衝突を起こすことが多い。海と共にする住民の「生」は、漁場との無境界性によって海の「恩恵」を得ることで発展した歴史と不可分であるにも関わらず、防潮堤計画がその背景を無視した形で推進されることが多いためである。金菱はこの「人・モノ・情報・金・文化が海を介して気仙沼に入り、そして出ていく」、海を介するあらゆるものの往来を「海との交渉権」と名付け、「無」防潮堤が海の暮らしを成立させてきたと説明する。また、「無」防潮堤による海との共存は、前述の物質的な恩恵だけではなく、人びとの死生観をも決定づけている。

第6章はこれまでの社会学的な論考とは異なり、個としての被災者の体験に焦点を当てる。途中で生が断たれた「彷徨える魂」との向き合い方について、金菱は被災者や遺族に震災当時のできごとを言葉にしてもらった「記録筆記法」を実施し、2012年に『3.11 慟哭の記録』として出版したが、この章ではその後の反響を元に生者と死者とを結ぶ回路の模索を試みている。

記録は震災後1か月から半年という、傷も癒えない中で被災者本人に依頼し、筆記してもらったという。記述の際は①命日への追悼の意味合い、②（他の）遺族の気持ちに寄り添う、③津波の教訓の3点を中心に記述してもらおうというセンシティブな依頼だったにも関わらず、依頼者の多くから賛同を得られたという。そして図らずも「記録筆記法」は被災者にとり「亡くした家族と共にいる実感を得たり、その関係性を自己のなかに深く意味づける機会となり、心の回復につながった（金菱2014：173頁）」と金菱は分析する。「記録筆記法」は書くことで事実と心象のねじれを解くなど、結果として癒しの効果をもたらしたが、その中でも特徴的なのは「痛みの温存」であるとする。「彼ら彼女ら被災者遺族にとっての心の痛みは、消し去るべきものでなく、むしろ抱き続けるべき大切な感情である（金菱2014：179頁）」という金菱の意見は、グリーフケアからのケアの観点と一致する。

結論として、金菱は「記録筆記法」が単なる孤独な記憶の掘り起こしや追憶ではなく、「亡くなった肉親と共にいるリアリティを手に入れる、あるいは大切な肉親との関係性の意味づけ（金菱2014：182頁）」に用いられたとし、この「協同作業」が生者と死者（あるいは、生ける死者である行方不明者）とをつなぐ可能性があることを報告している。

最後の赤井志帆氏による「震災覚え書き」は、この「記録筆記法」によってしたためられた震災当時の手記である。一章冒頭の被災に関する記述は、この赤井氏の手記からのものである。最後に追記として赤井氏は「私の名前で書かれてはいるが、実際には母との合作で成り立っている」と述べ、執筆に向き合うまで1年半かかった経緯、執筆中に心の中で生み出される葛藤、書き終えた時の「解放感と安心感」について詳細に綴られている。ぜひ実際に目を通し、ことばの奥から立ち上がる大渦のような感情のうねりや、家族への思い、「将来が見えない」と率直に綴るその眼差しがどのようなものか、味わって頂きたい。

4. 『呼び覚まされる霊性の震災学 3.11 生と死のはざままで』

『3.11 霊性に抱かれて 魂といのちの生かされ方』

『震災と行方不明 曖昧な喪失と受容の物語』

本章で扱う3冊のうち『呼び覚まされる霊性の震災学 3.11 生と死のはざままで』（以下、『霊性の震災学』）と『3.11 霊性に抱かれて 魂といのちの生かされ方』（以下、『魂といのちの生かされ方』）は「霊性」、『震災と行方不明 曖昧な喪失と受容の物語』（以下、『震災と行方不明』）は「行方不明」「宙づり」「空白」といった「曖昧な領域」を共通テーマとした論集である。本章ではテーマの共通性から前2冊、後1冊と分けて見ていきたい。

4.1 『呼び覚まされる霊性の震災学 3.11 生と死のはざままで』

『3.11 霊性に抱かれて 魂といのちの生かされ方』

まずは本書の構成を以下に紹介する。

A 『呼び覚まされる霊性の震災学 3.11 生と死のはざままで』（以下A）

はじめに

第1章 死者たちが通う街——タクシードライバーの幽霊現象（工藤優花）

第2章 生ける死者の記憶を抱く——追悼／教訓を侵犯する慰霊碑（菅原優）

第3章 震災遺構の「当事者性」を超えて——20年間の県有化の意義（水上奨之）

第4章 埋め墓／詣り墓を架橋する——「両墓制」が導く墓守りたちの追慕（斎藤源）

第5章 共感の反作用——被災者の社会的孤立と平等の死（金菱清）

第6章 672ご遺体の掘り起こし——葬儀業者の感情管理と関係性（小田島武道）

第7章 津波のデッドラインに飛び込む——消防団の合理的選択（小林周平）

第8章 原発避難区域で殺生し続ける——猟友会のマイナー・サブシステム（伊藤翔太郎）
プロジェクトを終えて

B 『3.11 霊性に抱かれて 魂といのちの生かされ方』（以下B）

まえがき

第1章 霊が語られないまち——他者が判断する身内の死と霊性（赤間由佳）

第2章 無力と弱さを自覚した宗教者の問いかけ——遺族の心に寄り添う僧侶（吉成勇樹）

第3章 手紙の不確実性がもたらす「生」の世界——亡き人とのつながりを感じるために（岩松大貴）

第4章 原発事故に奪われた故郷を継承する——牛の慰霊碑建立をめぐる（石橋孝郁）

第5章 原発事故関連死の遺族が「あえて」声を上げたのはなぜか——原発避難者としての自己確立（佐藤千里）

- 第6章 風が伝える亡き人への言葉——風の電話のある空間の癒し（村上寛剛）
- 第7章 地域コミュニティにおける「オガミサマ」信仰——魂のゆくえを見つめる人々（齊藤春貴）
- 第8章 最後に握りしめた一枚を破るとき——疑似喪失体験プログラムとアクティブ・エスノグラフィ（金菱清）

あとがき

評者なりの観点での分類を許されるのであれば、2冊は以下のようにテーマ分けが可能だろう。それは①「“見えないもの”と地域コミュニティの力」（A：1章、B：1章、7章）、④「集合意識としての慰霊碑」（A：2章、4章、B：4章）、②「“個”を越える」（A：3章、6章、7章、8章、B：5章）③「語りによる自己の再構築」（B：3章、6章）、⑤「その他」（A：5章、B：2章、8章）であり、これらのテーマが被災者の「霊性」とどうつながりを持ち、生きる力の動力となり得るかを論じたものである。当然ながらこの分類は便宜的なもので、一つの論考にはこれらのテーマが重複している場合もあり、視点の置き所によって分析の地平は多様に開かれていることは予め断りを入れておきたい。

“見えないもの”と地域コミュニティの力

A・1章（工藤論文）とB・1章（赤間論文）は共に「幽霊」をテーマとしているが、霊現象を通じた死者の受容過程が土地によって異なる。工藤は石巻市でのタクシードライバーによる幽霊目撃談の調査において、ドライバー達の語りが（遭遇する霊の見た目が若い場合が多いことから）未完の生への無念を感じられることや、霊に対し恐れというよりは畏怖の念を抱いていること、災害を経験した者同士としての共感などを挙げ、これらは石巻という地域性が持つ「内なる（身内意識）の連帯」がその要因にあるとする。

一方で、赤間は石巻とは対照的に気仙沼市唐桑では幽霊談が見られないとし、その背景に唐桑の文化の独自性を挙げる。赤間によると、唐桑では海難事故は日常の一部であり、その死生観が今回の震災を特別と認識していない。また行方不明者の「死」の判断についても「漁労長」が行うという。漁労長といういわば“Old Wise Man”的存在を中核とした、住民の死を引き受ける社会システムが、日常生活の中に構築されているのである。

B・7章（齊藤論文）は、陸前高田市では「オガミサマ」という口寄せ信仰の根付いた互助機構によって住民の日常生活が支えられていること、また、神や自然と人間とを取り持つオガミサマへの相談が、カウンセリングとは異なる形で住民の癒しや救いに繋がっていることが紹介されている。

集合意識としての慰霊碑

A・2章（菅原論文）は宮城県名取市の旧関上中学校に建立された慰霊碑を取り上げる。

菅原は宮城県に建立された震災慰霊碑を調査し、そのメッセージ性から「追悼」型、「教訓」型と分類するが、旧閑上中学校の慰霊碑は亡くなった14名の生徒の名が彫られているだけで、いずれにも分類できない「記憶」型と命名した。これには「復興」の名のもとに犠牲者たちが人々の記憶から忘れ去られてしまうことに対する遺族の心情が反映されている。記録型の慰霊碑は、追悼や教訓のように手を合わせるものではなく、遺族にとっては子どもたちが確かに生きていたという「事実」を公私両側面から追認可能なものとなる、新しい慰霊碑の在り方が示唆されると菅原は分析する。

A・4章（斎藤論文）は、宮城県山本町中浜で墓地跡に建立された千年搭（慰霊碑）と新たに建てられた墓との関係性を両墓制になぞり考察する。中浜では新墓地の建立後も、千年搭への「墓参」が絶えないという。中浜の千年搭は、犠牲者たちの慰霊碑であるのみならず、地区の殆どが流されてしまった中浜そのものの象徴であり、先祖の骨（の代わりの砂）が埋められた「墓」でもある。両墓制は通常、死穢の忌避から埋め墓と詣り墓が区別されているが、斎藤は、中浜における千年搭と新墓地の関係はそれに該当せず、生者側のその時々的心情により両方の墓参が選択可能な柔軟性を提供すると考察する。

B・4章（石橋論文）は、福島県双葉郡で震災後に建立された、牛を祀る慰霊碑を巡るメッセージを読み解く。双葉地区の牛飼いにあって牛は「所有する」もの以上に共に「いる」ものであり、石橋はこれを牛に対する祈願（生）の文化と供養（死）の文化が根付いていること、また牛飼いが牛のいのちに最後まで責任を持ち接してきたことを、「屠ること」と「殺処分」の意味付けの差異等を用い説明する。慰霊碑は双葉の人びとにとって殺処分された牛の供養のみならず、地域再生の意思やかつての双葉地区の記憶の場であるとする。

“個”を越える

A・3章（水上論文）では、南三陸町防災対策庁舎の県有化（震災遺構としての決定の保留）が遺族間で意見が分裂する中、県有化という中空状態がむしろ遺族たちの感情を鎮める可能性について言及する。水上は広島原爆ドームの保存過程を例に挙げ、身内が亡くなった建物の震災シンボル化が遺族の心をえぐりかねない中、「時間」が遺族から悲しみや苦しみを手放させ、辛い当事者性を超え、より広い観点から考えることが可能になった事例を挙げる。

A・6章（小田島論文）は、一時的に仮埋葬（土葬）されていた672遺体を、わずか4か月で掘り起こし（火葬による改葬）を成しえた理由について、「感情管理」の在り方を中心に考察する。短期間による掘り起こし作業は、流れ作業と遺体への配慮とのせめぎ合いの中で行われたが、感情を柔軟にコントロールする事で両立を可能にしたという。そして一連の作業の背後には、遺族が遺体と対面する際の感情を大切にすの用いの意味や、遺体への敬意や尊厳といった、葬儀業者自身の感情よりも遺族の気持ちを優先する思いがあっ

たと分析する。

A・7章（小林論文）は、ボランティアベースであるにも関わらず死を恐れずに震災の現場に飛び込んだ消防団の行動原理について分析する。そこには団に代々受け継がれる「義勇精神」の存在や団員同士の日常的な精神的連帯、そして地域を守るという使命感（ここではウェーバーのいう「価値合理的行為」としている）といった要素があり、それらが震災という限界状況において、団員たちの相乗的な原動力となったと分析する。

A・8章（伊藤論文）では、原発避難区域で捕獲活動を続ける「有害鳥獣捕獲隊」を取り上げる。捕獲隊は、かつて訪れていた狩猟動物の飼養塔に原発事故後は訪れなくなり、自身の生において動物を捕る事の意味づけを変化させていると伊藤は分析する。かつては生活の一部であり、動物への感謝が伴っていた「狩猟」が、時にはゲーム的な取引を含んだ「捕獲」へと変化することで「動物から町を守るための行為」として再定位される。

B・5章（佐藤論文）は、原発訴訟という、声を上げることで様々な困難が予期される行為を取って行った原発関連死遺族について、「モラル・プロテスト（人間存在や生き方に焦点を置く運動）」をキーワードとして読み解く。「原発事故関連死遺族」であることを隠すのではなく受け入れ、更にはそうした自身を、個を超えて社会や他の被害者の為に生かすという選択することで、自身の生き方に積極的な意味を見出す様子を描写する。

語りによる自己の再構築

B・3章（岩松論文）は、遺族が故人に宛てて書いた手紙を投函することのできる「漂流ポスト（岩手県陸前高田市）」に焦点を当て、遺族が手紙を書き続ける意味について考察する。岩松は金菱の「記録筆記法」を援用しながら、手紙を書くことによる自己の再構築について言及しつつ、書かれた手紙が（非公開希望を除き）近くの喫茶店で公開されることで、同じ辛さや心の痛みを持つ人たちとわかち合うこと、また手紙を送るが届くか分からないという不確実性が、死者との関係性の維持にも繋がると分析する。

B・6章（村上論文）では岩手県大槌町にある「風の電話」の持つケアの潜在性について分析する。「風の電話」は通話不可能ないわゆるオブジェであるが、「通話」という行為を通じて受話器の先にいる故人との繋がりを感ずることができるといふ。岩松論文同様に村上もまた金菱の「記録筆記法」を通話行為に援用しつつ説明し、そしてこの「繋がりの感覚」を助長させる効果として、電話ボックスを取り囲む自然の役割についても考察する。

その他

A・5章（金菱論文）は、被災者が外部の共感行為によって却って傷付いていく様子を「共感の反作用」と呼称し、ある被災者の体験を元に考察する。被災者の中には家族や家を失った人もいれば、家族も家も流されなかった人もいる。外部は主に前者を「被災者」

として扱い、後者は「公認されない悲嘆」を抱えながらその背後に追い遣られ、自身のグリーフを打ち明ける場や社会性が失われていく様子を描写する。それを受け金菱は、災害はその人にとって人生最大の体験であり、その意味付けに大小はつけがたく、災害は平等であるという地平に立つ必要性を説く。

B・2章（吉成論文）は、被災者の一人となったある宗教者（曹洞宗）たちのインタビューを通じて「宗教的な教えをもとにしつつも、個々の人間の弱さを自覚して遺族の心に寄り添う活動をしている」と分析し、「被災者を導くのではなく、弱さを持ちながら共に歩いていく存在」を新しい宗教者のかたちではないかと考察する。

B・8章（金菱論文）は、他者に震災の出来事を「他人事」として聴かずに聴いてもらう方法として生まれた「疑似喪失体験」のグループワークの紹介と、その結果から生まれた「人間」の境界意識への問題提起、そして生と死の間に横たわる広大な中間領域や「曖昧な喪失」の中に、悲嘆を生きる中でのより積極的な意義を見出そうとする。

4.2 『震災と行方不明 曖昧な喪失と受容の物語』

以下に本書の構成を紹介する。

まえがき

第1章 踊りの中で生き続けるもの——行方不明者と故郷と想起（新野夢乃）

第2章 なぜ津波と原発災害後も、故郷の記憶は風化しないのか——漁師文化と海への礼儀作法（関颯都）

第3章 ある行方不明家族の“もやいなおし”——旅する父、娘を身近に見守る父母（牧野大輔）

第4章 家族の思い出と記憶のコールドスリープ法——夫の明るい姿を想起させる心の回復法とコミュニティの順応力（福田浩也）

第5章 震災の記憶と感情の行方不明——失われた記憶と家族関係（雁部那由多）

第6章 ある宗教者を変えた肉親の死——曖昧な喪失の当事者になるとき（茂木大地）

第7章 死を追認しない供養のあり方——本音と向き合う遺族の葛藤とレジリエンスの獲得（松永祐太郎）

第8章 「区切り」から読み解く行方不明者遺族の歩み——妻の遺骨が見つかるまでの節目と再生（本田賢太）

第9章 原発災害後の“宙づり”状態を脱して——農地への働きかけを継続する仮定的な予見（庄司貴俊）

第10章 牛飼いとして曖昧に生きる意味——原発避難区域に戻った元酪農家の変化（石田晃大）

第11章 生活再建のなかの慰霊碑建立——遺族の心情をつなぐ震災犠牲者の鎮魂（石田晃

大・伊藤理南・蛭田優介)

第12章 行方不明の土地をつなぎとめる「偽」アート——荒浜「偽バス停」の仕掛けとオモイデバスツアーの成功 (野尻航平)

特別寄稿 儀礼文化の伝承は最も確実な災害の記憶装置なのだろうか——(林承緯)

本書は、震災がもたらした人や故郷、記憶などの「曖昧な喪失状態」が、性急な再定位を避けゆっくりと時間をかけることで徐々に意味が生まれていく様子を描く。生でも死でもない「曖昧な領域」「宙づり状態」であることにこそ、人間の智は回復のための積極的な意味を生み出していくという、いわばレジリエンスをめぐる論考といえる。

こうした共通項のもと、各章は次のようにテーマ分類が可能であろう。すなわち「記憶と儀礼」(1章、特別寄稿)、「記憶と生きなおす」(2~5、12章)、「儀礼の意義と反作用」(6~8章)、「生活再建」(9~11章)であり、これらと「曖昧」「宙づり」状態との相互関係について論じたのが本書といえる。前項同様、この分類は本論文での便宜的なものであり、一つの論考には複数のテーマが跨ることを予め承知おきいただきたい。

記憶と儀礼

第1章(新野論文)は、津波で故郷と父親が行方不明状態となった筆者自身の、伝統芸能「田植踊」を通じて故郷と父親との記憶が蘇る様子を描いた、一種の当事者研究と位置付けられる。福島県浪江町請戸には「安波祭」という海の安全や大漁祈願の祭があり、豊作祈願の田植踊はその中の伝統芸能の一つである。震災後、田植踊には追悼の意味が自然と加わり、離散した元地元民が集まるための求心的行事としても機能する。新野は田植踊を通じて自身に想起された鮮明な心象風景について分析し、田植踊を「あの頃の請戸に帰る道」と述べる。

特別寄稿(林論文)は、1845年に台湾雲林県金湖で起きた大洪水(金湖大洪水)の犠牲者の鎮魂目的で始まった「牽水状」と呼ばれる儀式が、現在も廃れることなく続いている意味について考察されたものである。当初は洪水の犠牲者の魂を湖から引き揚げて祀ることが目的であったが、その犠牲者数を大きく上回った現在でも儀式は継続される。その背景として、水害の起きやすい自然環境故に水難事故の悲劇が常に更新されることで、牽水状が水難事故全般も含む鎮魂儀式へと発展し、過去の洪水への記憶の継承と共に、人々に鎮魂と慰撫を与え続ける存在となったためと分析する。

記憶と生きなおす

第2章(関論文)は、請戸地区の元住民の間で漁師を続ける人とそうでなかった人の間では、故郷に対する記憶の維持に違いがあることに着目した論考である。関はその差異を、住民(オカ)と漁師(ウミ)の時間観の違いであるとし、海を基軸とした生活サイク

ルを持つ漁師の時間が常に円環的であり、それが震災前の請戸地区の生活感覚、ひいてはその記憶を維持できる要因であるとする。

第3章（牧野論文）は、残された娘と行方不明の父親との関係性維持のあり方について、ある被災者の実践を紹介する。写真の中の両親との絶え間ないコミュニケーションが日常の一部になることにより、親子の関係性は震災前よりも親密性を増していく。行方不明の父との間には「旅」の物語が生まれ、それが被災者の生前の家族への未練や無念を昇華し、親子の肯定的な先へと繋がる導線となったという。

第4章（福田論文）は、第3章とは異なる形で行方不明の夫との関係性を良好に保持している女性の記憶の維持方法について説明する。地域全体が多数の死者・行方不明を出した「喪の状態」であり、人々は悲しみの共有を容易とする。そうした地域を支えつつ、普段は仕事に集中し、合間合間に夫を思い起こすことで記憶の鮮度を保つという「記憶のコールドスリープ」のあり方について描写する。

第5章（雁部論文）は、被災後の家族関係とその後の自身の環境変化により、震災時の記憶の扱い方に差が生じた2事例を紹介する。一方は記憶の封印、もう一方は記憶の再確認という選択を取り、その要因には自身の家族との距離感や環境の変化などが挙げられている。雁部は、いずれの選択にしても当事者が自身の置かれた環境を守るという動機は共通し、記憶を「行方不明」にしておくこともまた選択肢の一つであること、また、一見軽度の被災に見えても、だからこそ感情的に複雑な問題が生じうると考察する。

第12章（野尻論文）では、仙台市若林区荒浜で行われている「オモイデバスツアー」というアートイベントの事例を用い、参加者たちが嘗ての故郷の記憶の共有することで荒浜再生に寄与していることを説明する。「オモイデバスツアー」は、バスという身近な公共交通を用いたいわば巡礼の旅と捉えることができるが、野尻はその成功の背景をアートの持つ「親近性」「文化性」「想いの一致」を手掛かりとして分析する。

儀礼の意義と反作用

第6章（茂木論文）は、一人の宗教者（天台宗住職）が母の行方不明により「曖昧な喪失」の当事者となり、宗教的活動と実存的生との間で生じた様々な葛藤について描く。当人は行方不明のままの母の葬儀を行うのに4年かかったが、葬儀後は死者との向き合い方が変化したこと、残された人間の役割を考えられるようになったことや、生き残った罪悪感が使命感のようなものに変化したと茂木は分析する。

第7章（松永論文）では「死を追認しない供養」のあり方として、あえて法要や葬儀を行わないままの生き方を事例に挙げる。葬儀や法要は心の区切りや、悲しみの共有の場として機能する一方で、それが反作用として働く場合もあり、死の追認も他者の介入もない個人としての供養のありかたが、むしろ残された人のレジリエンスの力を醸成するケースがあることを紹介する。

第8章（本田論文）は、人生の「区切り」の持つ意味を日本人の時間観を元に考察する。本田は宮田登の論を援用しながら、日本人の時間理解が「生と死」「昼と夜」「冬と夏」といった二項の反復によって構成され（加えるなら「ハレ」と「ケガレ」等もその一つだろう）、そこに仏教の輪廻転生の円環的時間観が加わることで、円環する生と死の中に「区切り」が発生すると説明する。行方不明者との関係性の中で小さな「区切り」（節目的区切り）を付けることで、実際に遺体が上がった際に死を追認する「区切り」（再生的区切り）が可能となり、死者と共に生きる新たな生へと繋がっていく様子を描く。

生活再建

第9章（庄司論文）は、原発被災地の農家が、生活の「宙づり」状態をいかに脱したかについて、松井克浩らの論考を援用しつつ考察する。庄司によると宙づり状態は「固有性の喪失」「時間間隔の喪失」「イメージの喪失」という三要素で構成されており、この喪失をいかにして回復するかが重要であるとする。被災地の農家たちは、他者の眼を常に自覚しながら農地を整え続け、農業に従事することで農家としての循環サイクルの中に生き、その行為がやがては自分の子や孫への土地の継承を見据えた行為となることで、今は生産性を伴わない行為であっても将来に繋がるイメージを確保できると分析する。

第10章（石田論文）では、とある酪農家が、国の指示とはいえ経済動物であった牛を餓死させてしまったことが、牛の「いのち」に対する再考の契機となった事例を挙げる。牛を生産物として扱う「酪農家」であることと、牛のいのちを尊重する「牛飼い」であることとの狭間に自らのアイデンティティを置くことでモラトリアム期間を作り、迷いながら今後の生き方を模索していく姿について考察する。

第11章（石田・伊藤・蛭田論文）は、慰霊碑建立が「生活再建の土台として」最優先とされた宮城県三陸町西戸地区の例を挙げる。そこには、死者および行方不明者もコミュニティの一員であるという強い意識が住民にあり、その鎮魂自体がまずは生活再建の一部であるという認識が建立の背景にあること、そして慰霊碑は同時に住民同士を結び付けるコミュニケーションの場としての役割を持つことを明らにする。

5. コメント

以上、4冊の著書/編著を紹介したが、以下に評者なりのコメントを記したい。

社会学的グリーフケア分析の試み——『震災メメントモリ』

グリーフケアの観点に引き付けてみると、前述の通り、『震災メメントモリ』は社会的見地からのグリーフケア研究と位置付けることが可能である。

金菱は、3.11で起こった津波について、自然現象として目撃もしくは体験した津波本体

を「第一の津波」、その後やってきた生活全般の過酷な再編と心身の苦痛を伴う経験を「第二の津波」と捉え、後者に焦点を当てる。第二の津波に対し、多彩に展開される人間の攻防戦をつぶさに描くことで、生活戦略のヒントを見出し、人智を超えた災害に対する集会的/集団的コントロールの術を現場から学び取ることができるとする。よって、6章以外はおおむね、人間の集団的営みである共同体が、セーフティネットもしくは少しでも元の姿に戻ろうとする牽引力として、いかに機能したかの考察と纏められる。同時に、共同体とは、その土地に住む人間が長年育んできたものでもあり、共同体を見るということは、その地に生きる人間の知恵や生きかたを見ることとも言えよう。金菱は詳細なデータや資料を元に被災地の現状を示した上で、その地に住む人びとの声を汲み取ることで丁寧な肉付けし、現地の人びとの生のあり方を、文章からリアルに浮かび上がらせる。

その上で、気になった点について、いくつか所感を述べたいと思う。

2章で、釣石神社の復興イベント未完の背景として地元民の〈ワレワレ意識〉の温度差が挙げられており、評者もその結論には同意するのだが、そもそもご神体である巨石の「合格祈願」のご利益と地元民との密接度が、他の事例と比して薄いところにも要因があるように感じた。「合格祈願」は全国の受験生には重要だが、地元の世帯が受験生を抱える場合はともかく、住民との日常的な接点が本文からは見えづらかった。震災後は復興のシンボルと位置付けようとしたにもかかわらず住民が離れて行ったのは、神社と住民との距離感もさることながら、復興シンボルとして巨石を掲げるには急ごしらえで、〈ワレワレ意識〉を繋げる程の求心力になれなかったのではとも推察する。利権を超えるような一致団結があったならばそれも克服できただろうか。いずれにせよ、そもそもとして、他の成功事例よりも〈ワレワレ意識〉を生み出す為の前提条件が厳しいようにも思われた。

4章、飯館村の女性の価値観は、全ての禍福を一つにする、非常に壮大な生、あるいはスピリチュアリティの在り方を想起させる。これが様々な権利を剥奪されたコミュニティで生きるためのレジリエンスとなり得る点は首肯できる。一方で、この価値観は彼女独自の価値観なのか、飯館村に残った他の人びとも共有する価値観なのかが不明瞭に感じられた。「災禍を吸収する弾力的なダイナミズム」として、土地に残った他の人びとの価値観も同様であったかをもう少し強く明示できれば、レジリエンスに富んだ価値観が災禍を吸収する可能性を、より積極的に見出せるのではないかと思われた。

原発事故で戦わない（自分の生の一部と捉えて敵としない）人がいる一方、現実には冒頭で挙げた訴訟のように戦う道を選んだ人もいる。同じハイリスクの土地の住民でも、戦う選択を取った人とは、どのように折り合いを付けていけるかについても、長期的展望を踏まえると今後の課題になるように感じた。

また、石巻の事例を通じて、人智を超えた災害も時間の経過によって現実の生活の中へと回収される様子について述べられたが（金菱2014：135頁）、注釈でその根拠として気仙沼の死者儀礼を例に挙げている点が気になった。気仙沼と石巻とでは幽霊話への住民の

反応が全く異なる背景として、その土地の持つ地域性や住民の気質が関わるといふ他の論考が示す通り（金菱編 2016： 22、23頁）、地域性と死生観が密接に関わっているのであれば、両者の文化の独自性を越境してどこまで援用可能かという懸念が残った。よって、敢えて石巻ではなく、気仙沼の死者儀礼を挙げた背景については、言及があるとよかったように感じた次第である。

『震災メメントモリ』はコミュニティを焦点にしているため、「社会意識」という常識の通念が被災者の経験を打ち消すように、「コミュニティ」という通念がそこに住む個人の経験を取りこぼすのではないかという想像力もまた働きうる。しかし、それに対しては6章や後続する諸編著がその応答の一つと捉えることもできよう。

一貫して被災地で今を生きる人びとや死者を正面から見つめ続けた論考である。アクティブ・エスノグラフィというその方法論を、デリケートな現場で採用する際に想定される様々なハードルの高さや苦労を想像すると、本書という大きな成果が形となったことに頭が下がる思いである。

「靈性」を描くことについて——『呼び覚まされる靈性の震災学』『3.11 靈性に抱かれて』

「靈性（あるいは「スピリチュアリティ」もだが）」という言葉は、大変深遠かつ靈妙であるにも関わらずであるが故に、その説明や理解については議論が尽きず、困難が伴う。だからこそ、その全てを語れないにしても、その現場でしか体感できない「靈性」とは何であったかについては、非常に大きな関心が寄せられるし、評者もそれを期待して読み進めていた。

「靈性」を鍵語とした2冊の編著であったが、全体を通した所感としては、鍵となる「靈性」の指すものが臆気であり、殆どの場合、「生と超越的な何か」が繋がる諸相を表現する際に「靈性」がマジックワード的に用いられていたように見え、それが大変勿体なく感じる事となった。一応、『靈性の震災学』のまえがきで、金菱は鈴木大拙を援用して語る若松英輔の「形而上学的超越とつながる、いのちの根源的な働き」という言説を用い、「人間の秘められた高次の感情」と、その大まかなスキームを説明している（金菱編 2016： xi頁）。各論でも出来事や当事者の心情が丁寧に記述されているが、それをなぞることで読者が各論の「靈性」について想像をめぐらすことは可能であっても、それはあくまで「読者側の想像」であり、筆者たちが現場で感じた生々しい「靈性」の姿とは限らない。各論のエスノグラフィックな語りの中でリアルに浮上したであろう、各筆者の眼から見えた「靈性」に関する記述は、評者としてはもっと具体的であってもよかったように思われた。

あとがきで筆者たちは「あらゆる悩みを対象にして地域に根付いたのが、文化であり、物であり、場所であり、人であった。生活に溶け込み一見特別な効果がないように見える癒しの媒体がいわば靈性として、震災においては大きく作用したのであった（金菱編

2016：175頁）」と総括している。多くの被災者が支えられてきたという文化や物、場所、人の行為は通常であれば「生活の知恵」の範疇にも収まるものである。それが「癒しの媒体」へと換言された要因は何か。その「あいだ」をつぶさに見つめた言語化の積み重ねが、震災における「霊性」というものを、より立体的に考える際の一助になるように感じた次第である。

「曖昧な領域」を肯定する——『震災と行方不明』

『震災と行方不明』が通底して主張するのは、どこにも着地点を求めない領域への積極的・肯定的な評価であろう。生と死をめぐる複雑な次元の諸問題が、時間をかけることで初めて醸成されていく過程は、現代社会がつねにスピードや合理性を求めることへの異議申し立てのようでもあり、本書の最も重要なポイントである。実践的ながらも深遠な被災者によるいのちの営みは、次第にその人なりの解を見出していく。その様子は、本書でも示している通り、人間が元来持つレジリエンスの力そのものである。

ではレジリエンスの力の醸成に必要な時間や空間についても、単に必要という主張ではなく、思想的により積極的な意味付けは可能だろうか。この問いに対する一つの応答として、寺尾寿芳によるグリーンケアと「聖土曜日」の論考を参照してみたい。古来より、宗教は生や死の諸問題への豊かな智慧を提供してきた。現代社会の価値観においては説明の難しい「曖昧な領域」に対しても同様に、宗教はその有意味性を提示する。本書で扱われた「曖昧な領域」に対してもそれは例外ではなく、積極的な意味付けの一助を担うと思われる。

寺尾は、残された者が悲嘆のプロセスと向き合う際の手がかりとして、カトリックの「過越の3日間」、特に「聖土曜日」の意義について言及している。寺尾は、過越の3日間でキリストの十字架上での受難（聖金曜日）、キリストが永遠の生命に入った日（復活の主日）の合間にある聖土曜日については「主の墓のもとにとどまって、その受難と死をしのび、祭壇の飾りを取り除き、ミサもささげない」不活動の日であり、他の曜日と比して印象が弱いとする一方、「受難から復活への中間にあたる死から再生への転回の要」であることを指摘する。そして「典礼の重心にあり、かつそれ自体は不在性によって貫徹される空虚な「間」（葬というより喪）」である聖土曜日の意味を悲嘆のケアに接続して考える際、「不在という否定性が許容される以上、その時機を無視することは許されないとともに、そこでは到達すべき指標はなく、だからこそ『何もできなくても許される』のではないだろうか」と論ずる⁴⁾。

「聖金曜日（受難）→聖土曜日（死から再生への転回）→復活の主日（回復）」のプロセスと、「被災→曖昧な領域→回復」のプロセスの類似性は示唆的である。言うまでもなく本書の「曖昧な領域」は「空虚な間」と共鳴する。『活動』の否定性への線引きに関する議論は残るかも知れないが、現代風に換言すれば、社会や世間の求める活動ペースから

一步退き、新たにいのちを生きなおすために自己を整える間があり、それは無視されてはならないのである⁵⁾。そうした意味では、いささか大袈裟かも知れないが、本書は脱宗教の文脈からの「聖土曜日」の再発掘と捉えられるかも知れない。本書に登場した被災者たちの「今を生きる物語」の中には、「曖昧なままでいられる領域=あわいの世界」が、おのずから大切にされてきていたのである。

さいごに

金菱氏らによるこれらの著書/編著は、エスノグラフィックな現場参入によって汲み取られた被災者達の体験がいかに多様で、他と比べられようのない個々の「生」の姿があるかを、改めて浮き彫りにした。これらの著書/編書に通底するのは、被災者一人ひとりの生への丁寧な眼差しである。「大きな声にかき消される小さな声」を汲み取ろうとする試みは、金菱氏自身の阪神淡路大震災の原体験にあったようである。

阪神高速道路やビルの倒壊、長田地区の火災現場などを上から俯瞰する報道が圧倒的に多く、現場の被災者の小さな声がかき消されていくことであった。なかには報道ヘリコプターの騒音で救助を求める声が遮られるという、あってはならないことが起った⁶⁾。

氏自身が体験した自己の底の痛みは自己を超え、東北の被災者の痛みや、その先のコミュニティや環境へと接続されていったように評者には感じられた。

また、共著者であるゼミ生の多くも震災の体験者で、だからこそ、この繊細な問題に携わる事の困難さも十分体感していたと察せられる。実際の調査の困難さや、それと同時進行で考えなければならない自身の人生行路とのぶつかり合いなど、様々な困難の痕跡があとがきから伺えるが、それらを克服して形にした労苦は相当なものであったと想像する次第である。被災者の声を形として残して継承するという大役を引き受けたこと、そしてこの未曾有の災害で立ち現われた日本人の「死」に対する意識の問題提示や悲嘆の扱いかたの可能性を提示したことなど、現代日本社会に対し果たした役割は大変大きいことは、改めて強調しておきたい。

金菱氏らによる著書から、評者は多くの学びを得ることができたと同時に、今後の様々な災害で想定される課題についても逡巡することとなった。

例えば、今回の諸論考で、伝統に根差した共同体（コミュニティ）の力が人々の回復に大きく寄与していることが確認された。石井誠士はホモ・クーランズの議論の中で「環境が壊れることは個体が壊れることである。環境と個体とは、こころとからだと同様に、切り離されない⁷⁾」と述べているが、人間は自分自身を含めて無数のいのちと全方位的に繋

がり生かされており、その有機的集合体が共同体であるともいえる。

東北の事例が見せた多くのいのちとつながる共同体であるが、今後、何かしらの大規模災害などを考える際、首都圏など共同体意識の希薄な都市部ではどう考えればよいかという課題が、今回のケースから逆照射されて浮かび上がる。

R. ベラーは『心の習慣』で「共同体」と対比する用語として「ライフスタイルの飛び地」を掲げたが⁸⁾、現代社会、特に都市部において主に「ライフスタイルの飛び地」を構成するのは、物理的な土地よりはむしろSNSに代表されるようなオンライン空間であろう。しかもこのオンライン上の飛び地がセーフティネットとしての機能するのは補助的で、またその効果も使用者の積極的参与依存になっていることも問題である。情報格差がセーフティネットへの到達格差となってはならない。

地域性や「飛び地」の性質差を超えて、人間の持つレジリエンスそれ自体ははたらくだろう。だがその可能性に任せるだけでは不十分で、その力が十全にはたらくための様々な狭間に存在する領域、すなわち「あわいの世界」に静かに佇むことを許されるような社会のあり方が求められているように思われる⁹⁾。

〈参考文献〉

石井誠士『癒しの原理 ホモ・クーランズの哲学』人文書院, 1995年

ベラー, ロバート・N『心の習慣 アメリカ個人主義のゆくえ』島蘭進, 中西圭志訳, みすず書房, 1991年

寺尾寿芳「グリーンケアと過越の神秘——聖土曜日からの試論」, 「グリーンケア 第6号」上智大学グリーンケア研究所, 2018年

〈注〉

- 1) 一審提訴時。二審口頭弁論集結時には3817名。<http://www.nariwaisoshou.jp/archives/001/202010/%E5%88%A4%E6%B1%BA%E8%A6%81%E6%97%A8.pdf> (『生業(なりわい)を返せ、地域を返せ!』福島原発訴訟原告団・弁護団Webサイト内判決要旨。2020年10月4日取得)
- 2) https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200930/k10012641371000.html?utm_int=news-social_contents_list-items_132 (NHK WEBNEWSより。2020年10月4日取得)
- 3) 2020年より関西学院大学所属。
- 4) 寺尾, 8頁。
- 5) 被災者の中には、社会的活動を通じ、社会と自己とを接続させることで自身の回復へと繋げるケースもあり、字句通りの「活動の否定」がここで適用されるとは限らない。もし聖土曜日の活動の禁止がそのまま「禁忌」を意味するのであれば、この解釈には慎重さを要するかも知れない。本稿では、「活動の否定」そのものより、その否定の背景に根拠を置き、よって聖土曜日は(回復のための)「不活動が許容される間」ではあるが、自己回復のための活動の否定までは意味しないものとして解釈した。
- 6) 金菱2014, 164頁。

- 7) 石井、41頁。
- 8) ベラー、394頁。
- 9) これは必ずしも社会的資源の拡充のみを意味しない。もちろん社会福祉等の推進は重要であるが、石井も指摘するように、それ自体が人間の生きる意味や目標になるわけではない（石井：86頁）。制度や社会のみに棚上げせず、いのちの連続体としての共同体が有機的に働くには、一人ひとりの意識もまた問われていくことになるのは言うまでもないだろう。